

27 明治の日本を描いた画家：フェリックス・レガメ

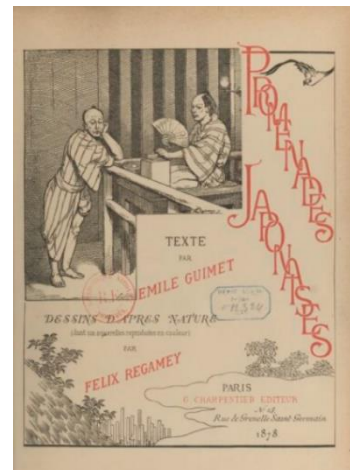
芸術一家に生まれたフェリックス・レガメ（1844-1907）は、絵の才能を見出されて、若い頃から多くの新聞や雑誌にデッサンを描きました。レガメは、デッサンと絵画の勉強を熱心に続け、美術学校でデッサンを教えました。1870年に普仏戦争が始まると、レガメは、勉強と教職は中断したものの、戦場ジャーナリストとしての活動は続けました。レガメは、戦いの前線から気球郵便を使い、パリとロンドンの絵入り新聞各紙に戦況を描いたスケッチを送りました。1873年にアメリカへ渡り、挿絵を描いて生計を立てながら、パリ包囲戦の主要事件を自身のスケッチとともに語る講演会を行いました。そして、1876年のフィラデルフィア万国博覧会で、リヨンの実業家エミール・ギメ（1836-1918）と出会いました。日本に憧れを抱いていたレガメは、フランス政府の「極東宗教学術調査使節」に参加したギメとともに、記録画家として日本へ旅立ちました。



Félix REGAMEY
フェリックス・レガメ

2か月間の日本滞在の間、ギメが多数の資料、彫像や工芸品を蒐集する傍らで、レガメは、寺社の光景、自然の風景や庶民の暮らしを描き続けました。

帰国後の1878年に、ギメが文章を書き、レガメが挿絵を描いた「日本散策」の第一巻が出版されました。この本は、パリ万博開催中に出版されたことから、ジャポニズム熱に沸く人々に人気を博したと言います。また、1880年には第二巻が刊行されました。



1884年にレガメは、公教育美術大臣から、パリ市の学校におけるデッサン教育の視学官に任命されました。また、1898年には同大臣から、日本における美術教育の調査を委託されて、再び日本を訪れました。この時の日本旅行は、245点の挿絵を収めた「日本の印象」と380点の白黒又は多色刷りの図版が挿入された旅行記「日本」の二冊にまとめられました。

レガメは1900年に設立されたパリ日仏協会の発起人の一人となり、その後事務局長に就任しました。設立総会には、お雇い外国人として日本に滞在した経験を持つ法学者の[ギュスターブ・ボアソナード](#)や軍人の[ジュール・ブリュネ](#)も出席しました。また、美術館を設立したギメも、この協会の活動を支援しました。そして、レガメは1907年にこの世を去るまで、この協会の世話役として奔走し、日仏文化交流の発展に貢献しました。

掲載日:2023年6月5日